

# 大学生のインターンシップ参加前後における 5 因子性格特性の変化

大倉 健

Changes of the Big Five Personality Traits Before and After the Internship Program  
Participation in University Students

Ken Ohkura

This study examined Big Five personality trait change between the internship program in university students. We found mean-level increases of extraversion and agreeableness, conscientiousness, emotional stability. There were differences between male and female students. Female students showed increases of extraversion and agreeableness, conscientiousness while male students showed no or little increases in these traits. Both showed no change in openness.

キーワード：ビッグ・ファイブ・パーソナリティ、大学生、インターンシップ

Keywords: Big Five Personality Traits, University Students, Internship

## 1. はじめに

大学生がインターンシップに参加することでどのような効果を得るのかという問題については、現在さまざまな視点から研究されている。たとえば、インターンシップが学生の学習意欲や就業意識に与える影響を研究したもの(松山・飛田, 2008; 平野, 2010; 三浦, 2016)、自己効力感(楠奥, 2006)や、「問題解決能力」(寺田, 2016)、「社会人基礎力」(真鍋和博, 2010)の成長を研究したものなどがある。これらは、いずれも大学や職場といった、特定のコンテキストに即した意識や能力の発達に注目している点で共通している。すなわち、学習意欲や就業意識は学生生活というコンテキストにおける動機付けであり、また、自己効力感や問題解決能力、あるいは社会人基礎力という尺度は、労働に適した意識や能力の発達という視点に立っている。しかし、そうした特定のコンテキストに即した意識や能力が変化するという現象の背後に、個人のより基本的な性格特性そのものが変化していることも考えられる。というのも、個人の基本的な性格特性が人生を通じて変化することはすでに多くの研究によって明らかにされてきたとおりであり(Roberts et al., 2006)、また、その中でも特定の性格特性が労働への適応や長期的なキャリアの成功とも関係しているという知見からも(Judge et al., 1999; Judge et al., 2002)、性格が就業経験とともに変化することが十分考

えられるからである。

性格は大学入学時から卒業時においても変化すると言われており (Robbins et al., 2001)、それは青年期 (adolescence) から成人期 (adulthood) への橋渡しの時期に、生活や価値観を大きく変えるようなさまざまな私的・教育的機会に恵まれるからであろう。その意味において、インターンシップのような将来に向けた活動も、学生の性格に何らかの影響を与えていると思われる。

そこで本研究では、20歳前後という時期に、長期のインテンシブなインターンシップ・プログラムを経験した大学生が、その基本的な性格面においてどのような発達を遂げるのかという問題について、性格5因子特性 (ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性) に注目して研究をおこなった。その結果、全体としては外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性の4つにおいて平均値が上昇することが確認され、とくに女子学生において、外向性、協調性、勤勉性の伸びが高いことが確認された。

## 2. 性格5因子の変化についての既存研究と、本研究の仮説

### 青年後期と成人初期

Roberts et al. (2006) がおこなった性格5因子特性の平均値の変化に関するメタアナリシスによれば、青年後期 (18歳~22歳) と成人初期 (22歳~30歳) では異なる成長パターンが観察される。すなわち、

- ・青年後期 (18~22) には外向性と開放性の大きな増加、情緒安定性に関する増加が観察される。
- ・成人初期 (22~30) には外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性が増加し、開放性は減少する。

青年後期と成人期におけるこの違いは成熟化の原理によって説明される (Robert & Mroczek, 2008)。学生時代には新しい人間関係の構築や、価値観を一変するような考え方の出会いを経験する機会が多くあるため、外向性や開放性といった側面が発達する。しかし、成人になるにしたがって、私的・公的な面における責任が増し、社会や人間関係における周囲との調和が重視されるようになり、協調性があり、勤勉であり、情緒が安定していることが求められるようになる。対照的に、そのように社会との適応を図る上では、社会の常識や通年に従わない新奇な発想に対して柔軟に心が開かれていることは不要であり、ともすれば阻害要因として働く可能性さえある。

そこで、本研究が注目するインターンシップに参加する大学生については、この青年後期と成人初期における2つの成長メカニズムが重なり合って働くと考えられる。インターンシップは、社会人としての生活を疑似的に体験するものであるから、性格面への影響については成人初期の発達傾向と類似した傾向が観察されると思われるが、一方で、学生たちはその間も大学生としての生活を継続しているため、青年後期の発達傾向も働き続けることになる。よって、この2つの影響が合わさるならば、インターンシップの効果により外向性や協調性、勤勉性、情緒安定性といった青年後

期における発達傾向と矛盾し合わない面での発達が促されるが、一方で、開放性についてはインターンシップが負の影響をもたらし、青年後期における成長効果と相殺することが予想される。よって次の仮説が立てられる。

仮説1. インターンシップ参加の前後において、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性の平均値が上昇する。

仮説2. インターンシップ参加の前後において、開放性は変化しない。

### 性差による効果の違い

性格5因子の変化について、オランダの青年を対象として12歳から22歳までの長期にわたる過程について研究した近年の研究（Borghuis et al., 2017）によれば、性格は青年期において単純に増加するのではなく、特性によっては10代の半ばに一旦減少する（U字型）といった複雑な変化が起きていて、かつそのパターンは性別において異なる。このBorghuisらによる青年期の男女における性格特性の平均値の変化を要約すれば以下ようになる。

- ・外向性は、女子はU字型の軌跡を描き、男子は変化しない。
- ・協調性は、両性で増加する。
- ・勤勉性は、男子はU字型の軌跡を描き、女子は単調増加し続ける。
- ・情緒安定性は、女子はU字型の軌跡を描き、男子は変化しない。
- ・開放性は、男子は増加し、女子は減少する。

これらの知見に、上述の仮説を加味し、以下のような仮説が導かれる。

仮説3. 外向性、勤勉性、情緒安定性については、女子の方が男子よりも上昇しやすい。

仮説4. 協調性は両性において増加する。

仮説5. 開放性は、男子は変化せず、女子は減少する。

## 3. 調査の方法

### 調査対象

就実大学経営学部において15週間（53日間×8時間）の長期インターンシップ・プログラムに参加

した2015年度、2016年度の各年度の2年生を対象に調査をおこなった。

このプログラムは、学部必修単位の修得のため実施しているものであり、各年のインターンシップはすべて10月から1月までの時期に一斉におこなわれた。研修は基本的に月曜日から木曜日までの週4日間のペースでおこなわれ、9時から17時の勤務形態であった。

本調査ではこれらの学生を対象として、インターンシップ参加直前の9月末、終了直後の1月末に後述の質問票調査を実施した。

2015年度については、プログラムへの参加学生全73名（男性37名、女性36名）を対象に調査を実施し、欠損値のあるもの4名を除外して、68名（男性35名、女性33名）のデータを分析対象とした。また、2016年度についても同じく全参加学生80名に調査を実施し、欠損値を除外して76名（男性24、女性52名）を分析対象とした。結果として、男子59名、女子85名の標本を得た。

2015年度の派遣先は岡山県内の44企業・団体であり、その業種は製造業や小売業、卸売業、通信業、金融業、医療保険業、官公署など多岐にわたる。このうちから2016年度に40社が受入れを継続し、新たに5社が加わって、二ヵ年で延べ49社が受入れをおこなった。

## 質問項目

性格5因子の測定にあたっては、小塩 他（2012）らが作成した「日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)」を用いた。TIPI-Jは、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性（神経症傾向）、開放性の5つの因子について各2項目の質問から構成される。2つの質問はそれぞれ7点尺度であり、逆転項目の得点を逆に入れ替えて合算した値をそれぞれの因子の得点とする。

表1に、使用した質問項目と、それぞれのプログラム参加前、参加後における項目間の相関係数を載せた。項目間の相関は外向性と勤勉性において高く、協調性および開放性においてはやや相関が弱かった。情緒安定性については、研修前において項目間の相関がないものの、研修後には中程度の相関が現れた。この意味で、情緒安定性については、本研究の分析では測定の妥当性について十分な妥当性が確保できているとは言い難い。

ただし、表2に示すように、参加前と参加後における各因子の順位相関係数をみると、全ての因子において相関性が高い。つまり、個々の回答者における通時的な一貫性が存在し、情緒安定性についても、下位項目間の相関には問題があるものの、それぞれについては安定的な回答が得られていると言える。また、この結果は、性格がかなり安定的に発達することを示しており、個人によって極端に劇的な変化が生じるわけではないということも示唆している。

表1. 研究に使用した質問項目 (TIPI-J) と項目間の相関係数

質問項目	相関係数	
	研修前	研修後
<b>外向性</b>		
活発で、外向的だと思う		
R ひかえめで、おとなしいと思う	-.60 **	-.56 **
<b>協調性</b>		
人に気をつかう、やさしい人間だと思う		
R 他人に不満をもち、もめごとを起こしやすいと、	-.22 **	-.19 *
<b>勤勉性</b>		
しっかりしていて、自分に厳しいと思う		
R だらしなく、うっかりしていると思う	-.52 **	-.36 **
<b>情緒安定性 (神経症傾向)</b>		
冷静で、気分が安定していると思う		
R 心配性で、うろたえやすいと思う	-.13	-.28 **
<b>開放性</b>		
新しいことが好きで、変わった考えをもつと思		
R 発想力に欠けた、平凡な人間だと思う	-.28 **	-.26 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

表2. 研修前後の順位相関係数

	スピアマン 順位相関係数
外向性	.839 **
協調性	.598 **
勤勉性	.680 **
情緒安定性	.590 **
開放性	.631 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

#### 4. 結果

5つの特性におけるプログラム参加前後の平均値の変化は表3のとおりであった。外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性の4つにおいて、1%水準で有意な増加が確認された。ただし、外向性については効果量が小さかった。一方、開放性についても増加が観察されるが、その差は他の4つに比べて小さなものであった。以上の結果から、仮説1と仮説2が支持されたといえる。

表3. インターンシップ派遣前後の変化 (全サンプル)

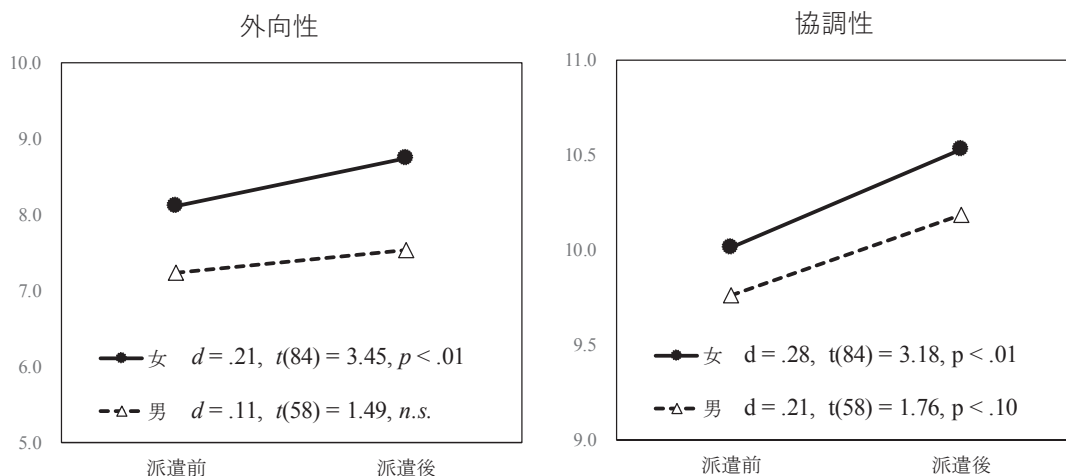
N=144	研修前		研修後		差	標準誤差	効果量	t検定	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差				t比	p値
外向性	7.757	2.893	8.243	2.824	.486	.133	.170	3.646	.000
協調性	9.910	1.943	10.389	1.896	.479	.137	.250	3.491	.001
勤勉性	6.528	2.272	7.076	2.309	.549	.154	.240	3.565	.000
情緒安定性	7.347	2.178	7.958	2.383	.611	.178	.268	3.439	.001
開放性	7.604	2.172	7.882	2.176	.278	.153	.128	1.810	.072

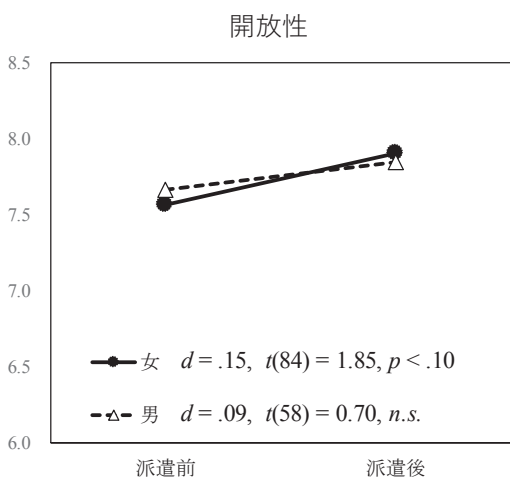
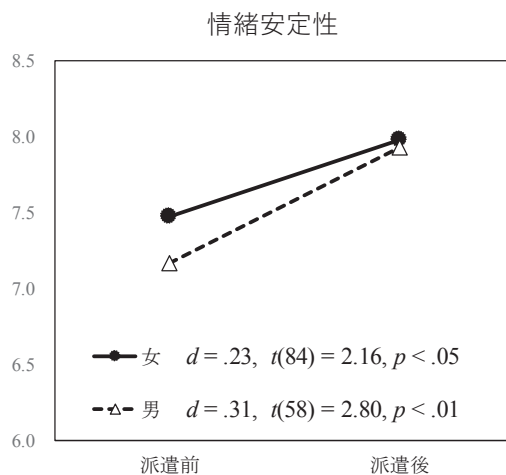
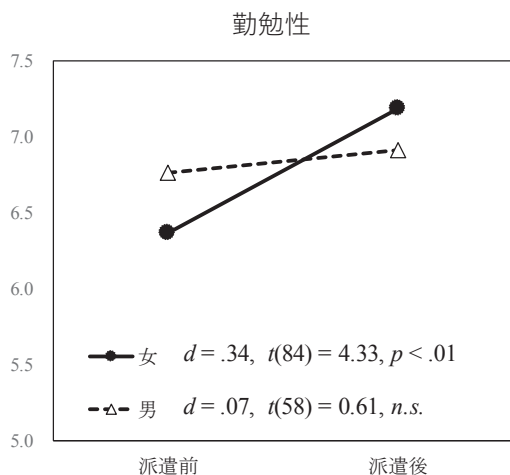
次に、性別によるパターンの違いについては、図1の通りである。外向性と勤勉性については女子学生においてのみ統計的に有意な差が観察され、男子学生においては有意な差が観察されなかった。一方、情緒安定性については両性とも有意な差が観察されたが、男性においてより大きな変化が観察された。これらは、仮説3を部分的に支持する結果となった。

また、協調性については両性において増加したものの、男子学生については統計的には弱い結果であった。仮説4は一応支持されたとと言える。

次に、開放性については、男子学生においては変化が観察されず、女子学生においてやや弱い変化が観察された。従って仮説5も部分的に支持される結果となった。

図1. 男女による変化の違い





## 5. 議論

外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性の平均値が上昇する一方で、開放性は変化しないという結果は、インターンシップによって体験される成人初期の状況がもたらす効果と、青年後期における効果、双方を加味して予測した通りの結果であった。ただし、この結果については、本研究の調査では女子学生の割合が全体の59%を占めていることによる影響も考えられる。既存研究では性別によるパターンの違いが指摘されており、たとえば開放性については男子において増加し、女子においては減少するという正反対の傾向がみられるからである。本研究においても男女それぞれの傾向を確認し、開放性については男子学生において変化が見られず、予測通りインターンシップによる相殺効果が働いたとも解釈できるが、女子学生については予測とは逆に、減少ではなく、わずかに上昇傾向を示した。青年後期における一般的な傾向（女子においては一般的に負）と、インターンシップという疑似社会人的な経験の効果（一般的に負）の交互作用は、女子学生にはより複雑な結

果をもたらすのかもしれない。

## 6. 結論

本研究は、インターンシップへの参加が、学生生活やその後の職業人として求められる能力といった特定のコンテキストに関連した意識や能力だけでなく、より基本的な性格面における変化にも影響しているという仮説のもと、長期のインターンシップ・プログラムに参加した学生の参加前後における性格5因子特性の変化について質問票調査による研究をおこなった。その結果、全体としては外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性の4つにおいて平均値が上昇することが確認され、また、とくに女子学生について、男子学生との比較において、外向性、協調性、勤勉性が顕著に変化することが確認された。ただし、本研究の調査ではインターンシップに参加した学生のみを調査対象にしているため、インターンシップの効果そのものを直接分析できているとは言えない。この点については、今後の調査では比較対象を設定して調査を行う必要がある。

## 参考文献

- 楠奥繁則 (2006) 「自己効力論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究－ベンチャー系企業へのインターンシップを対象にした調査」『立命館経営学』, 44 (5), 169-185.
- 平野大昌 (2010) 「インターンシップと大学生の就業意識に関する実証研究」『生活経済学研究』, 31, 49-65.
- 松山一紀・飛田浩平 (2008) 「大学生の職業意識とインターンシップの関係」『商経学叢』, 55 (2), 51-66.
- 真鍋和博 (2010) 「インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」『日本インターンシップ学会年報』, 13, 9-17.
- 三浦一秋 (2016) 「インターンシップの教育効果についての分析: 一学習意欲向上効果と就業意識向上効果の観点から」『インターンシップ研究年報』, 19, 1-10.
- 小塩真司, 阿部晋吾, カトロニ ピノ (2012) 「日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み」『パーソナリティ研究』, 21(1), 40-52.
- 寺田未来 (2015) 「インターンシップへの参加がキャリア成熟と問題解決能力の変化に及ぼす影響」『大手前大学論集』, 16, 125-138, 2015.
- Borghuis, J., Denissen, J. J. A., Oberski, D., Sijtsma, K., Meeus, W. H. J., Branje, S., Kurt, Hans M., Bleidorn, W. (2017) "Big Five personality stability, change, and codevelopment across adolescence and early adulthood", *Journal of Personality and Social Psychology*, 113(4), 641-657.
- Judge, T. A., Heller, D., & Mount, M. K. (2002) "Five-factor model of personality and job satisfaction: A meta-analysis", *Journal of Applied Psychology*, 87(3), Jun 2002, 530-541.



- Judge, T. A., Higgins, C. A., Thoresen, C. J., & Barrick, M. R. (1999) "The Big Five personality traits, general mental ability, and career success across the life span", *Personnel Psychology*, 52(3), 621-652.
- Roberts, B. W., Walton, K. E., Wolfgang, V. (2006) "Patterns of Mean-Level Change in Personality Traits across the Life Course: A Meta-Analysis of Longitudinal Studies", *Psychological Bulletin*, 132 (1), p1-25.
- Roberts, B. W., & Mroczek, D. (2008) "Personality trait change in adulthood", *Current Directions in Psychological Science*, 17(1), 31-35.
- Robins, R. W., Fraley, R. C., Roberts, B. W., & Trzesniewski, K. H. (2001) "A longitudinal study of personality change in young adulthood", *Journal of Personality*, 69(4), 617-640.